



西ノ前遺跡は、JR奥羽本線舟形駅の西約200m、小国川の左岸に舌のように飛び出した標高約72mの河岸段丘上にある。国道13号尾花沢新庄道路の建設に伴って1992年に遺跡の西半分に相当する4,500㎡が山形県教育委員会により発掘調査された。

調査では段丘の縁辺に並んだ大型の竪穴住居跡9棟や土坑約60基、大量の土器や石器が捨てられた沢状の落ち込みなどが見つかかり、約4,500年前の縄文時代中期前葉から中葉に営まれた、この地域の中核となる大集落のようすが明らかになった。

この調査で出土した土偶「縄文の女神」が国指定文化財となったのを機に、町では2002年、残った遺跡範囲を史跡に指定し、保存と活用をはかっている。縄文の女神とこの調査で出土した土偶は2012年に国宝に指定された。現在は山形県立博物館に常設展示されている。

遺跡に立つと、南の信仰の山猿羽根山の低い丘陵と北の清流小国川にはさまれた日当たりのよいこの場所が、女神を生み出した縄文のアーティストの感性を磨いたんだろうと妙に納得してしまう。



小国川の対岸から遺跡を見る。尾花沢新庄道路にかかる橋の先に数本見える杉の木のところ。



公園として整備された西ノ前遺跡。遺跡の表土に約1mの盛り土をして保存をはかっている。



公園のほぼ中央に建つモニュメント。女神は町おこしにも大活躍中。

山形県立博物館
〒990-0826
山形県山形市霞城町 1-8
tel:023-645-1111



JR山形新幹線大石田駅から西に向かって5分ほど歩くと角二山遺跡に着く。標高は75m、最上川の右岸に発達した河岸段丘の端にある。

遺跡は1970年に最北高等技術専門学校の建設に伴い発掘調査され、今から約5,000年前の縄文時代前期末葉の竪穴住居跡が6棟見つかった。そのうち2棟の上屋が復元されている。また縄文時代の生活面の下、約11,000年前に噴火した肘折火山から噴き出して積もった軽石層の直下から旧石器時代の終末を彩った細石刃文化の石器群約6,000点が出土。更にその下20cmから後期旧石器時代の石器も見つかった。細石刃文化の年代決定の指標となり、重なった3つの時期の文化を層位ごとに明らかにした重要な遺跡として1972年に県指定の史跡となった。

遺跡を訪ねると、既に廃校となった校舎から少し離れた敷地の隅、柵に囲われて2棟の復元住居がひっそりとたたずむ。近年、屋根の葺き替えなどの整備が進み、地元でも保存に力を入れている様子がうかがわれる。



復元された竪穴住居。背景にある林と相まってとても良い雰囲気。気軽に行って縄文時代の人々に思いをはせることができる。(写真：大石田町提供)



冬支度をした復元住居。建物は杭と板で頑丈に囲われ、大石田町が県内有数の豪雪地帯であることを改めて思い起こさせる。



角二山遺跡の出土遺物は高島町の山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館で見ることができる。左は縄文土器(見学には事前連絡必要)。右は細石刃石器群(常設展示)。

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
〒992-0302
山形県東置賜郡高島町安久津 2136-2117
tel:0238-52-2585



ちょうじゃやしき 長者屋敷遺跡

長者屋敷遺跡は、長井市北西部の草岡地区にある。1977年からの発掘調査で旧石器時代から弥生時代にかけて約1万年にわたり人々が暮らしていたことがわかり、市の史跡に指定された。最盛期は約4,000年前の縄文時代中期。^{たてあなじゅうきょあと} 竪穴住居跡や墓、祭壇がたくさん見つかった。

遺跡とその周辺は「古代の丘 縄文の森」として、縄文時代の復元住居エリアや資料館をはじめ、体験施設・キャンプ場・バンガロー・広場が整備されて市民の学びや憩いの場となっている。

長井市古代の丘資料館は正面入り口駐車場のすぐそばにある。ここには長井市内から出土した埋蔵文化財が収蔵・展示されている。常設展示は、長者屋敷遺跡から出土した土器や石器を中心にボリュームのある内容で、大昔の長井の歴史をわかりやすく学べるように工夫されている。何より縄文の人々が使った道具をそれが使われた場所で見ることができるのは臨場感が違う。

資料館では古代の勾玉作りや火起こしなどの体験教室も受け付けているとのこと。色々な切り口から考古学に親しむことができる。



復元された竪穴住居(写真：長井市提供)



土偶広場。地元の方がきれいに手入れしている。



入り口のトンネルを通ると竪穴住居の中へ出る。展示室ではこれまでの発掘調査で出土した土器・石器を見ることができる。約5,000年前の玦状(けつじょう)耳飾りは市指定文化財になっている。



長井市古代の丘資料館
〒993-0063
山形県長井市草岡 2768-1
tel:0238-88-9978



ながい 長井市

ふくら 吹浦遺跡

吹浦遺跡はJR羽越本線吹浦駅から東に約200m、^{ちょうかいさん} 鳥海山の噴火でできた標高5~15mの泥流台地の南西端にある。遺跡の総面積は38,000㎡。

遺跡は1919年に発見され、1949年の道路工事で土器片や貝殻が出たのをきっかけに、1951年から53年にかけて^{ちどうはくぶつかん} 致道博物館が主体となって調査を行なった。出土した縄文土器は「吹浦式土器」と名づけられ、本県の科学としての考古学の出発点となる記念碑的な遺跡として、県の史跡に指定された。この調査で出土した遺物は致道博物館の展示で見ることができる。

その後、国道7号線吹浦バイパスが遺跡の中を通ることになり、1983年から86年にかけて山形県教育委員会が工事予定地となる5,000㎡を^{たてあなじゅうきょあと} 発掘調査した。調査では約5,000年前の縄文時代前期末葉から中期初頭の^{ほったてしらだてものあと} 竪穴住居跡50棟と食べ物を貯える施設とみられる大きな穴(土坑)341基などが^{どこう} 見つかり、集落が台地の縁辺に沿って営まれていたことがわかった。また、平安時代の竪穴住居跡や^{ほったてしらだてものあと} 掘立柱建物の跡も同時に見つかった。

出土した縄文土器は、南東北に広く見られる大木式土器、北東北の円筒式土器、新潟県や北陸地方の土器と、それらの特徴が混じりあったものなど、さながら文化の十字路のようだ。

吹浦バイパスが開通してすでに何年もたち、いまこの地を訪ねると、吹浦から箕輪に抜ける道の途中にある、1950年代に発掘調査されたあたりにひっそりと建つ石碑と解説板だけが遺跡であることを伝えている。しかしこの台地の土の中には未知の宝が山のように眠っている。



1987年の発掘調査のようす。2か所に分かれて竪穴住居跡を調査中。左から奥に土坑群が見える。



吹浦川をはさんで遺跡を見る。吹浦バイパスの橋が台地にぶつかったあたりに遺跡がある。



山形県教育委員会の発掘調査で出土した縄文土器。(公財)山形県埋蔵文化財センターで一部が展示されている(見学には事前連絡が必要)



公益財団法人 致道博物館
〒997-0036
山形県鶴岡市家中新町 10-18
tel:0235-22-1199

ゆざ 遊佐町

